

第 17 回
浜松市芸術祭演劇部門

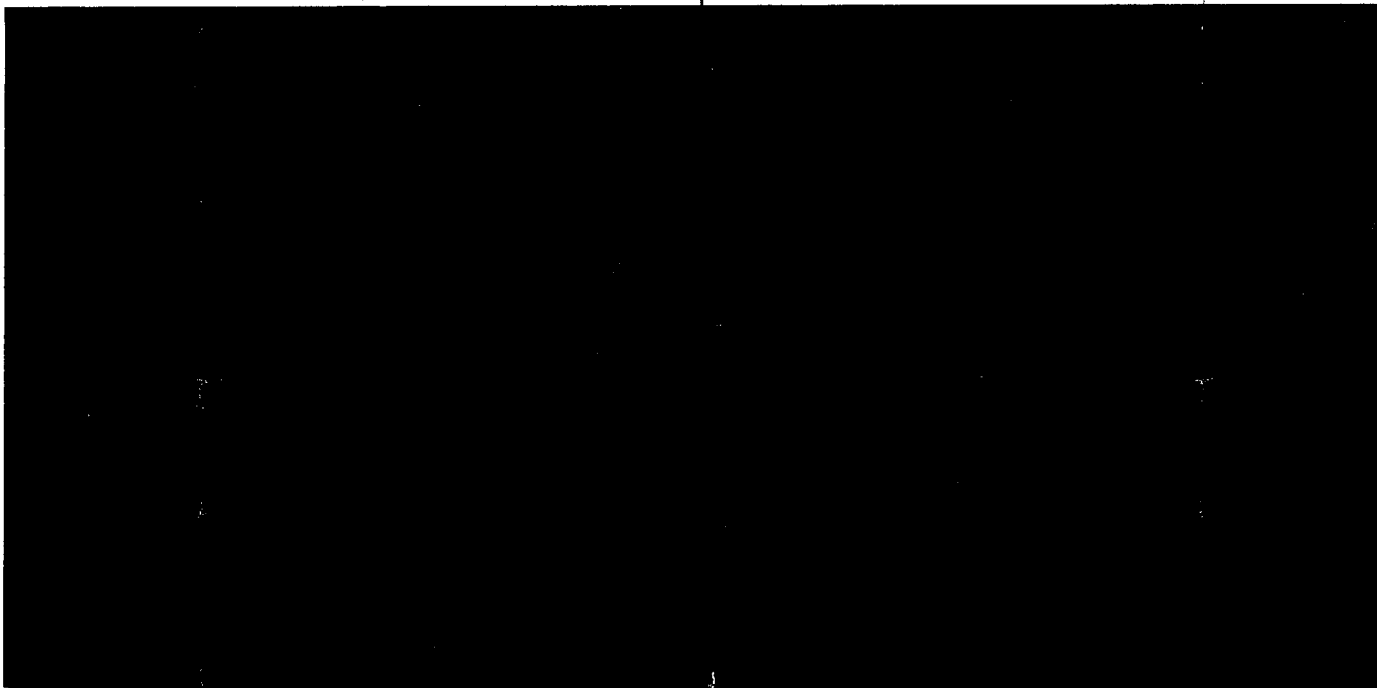


と き 1971.11.14 (日)
と ころ 浜松市民会館
主 催 浜松市教育委員会

上 演 時 間

- ◇11:00~11:55 「作品コンテンツ207」
18世紀フランス演劇研究会
- ◇12:10~12:55 「象の死」 引佐町青年学級
- ◇13:10~15:00 「獅子」 劇団からっかぜ
- ◇15:15~16:00 「逃散」 佐久間町劇団茶の実
- ◇16:15~19:15 「ブラック・コメディ」
浜松放送劇団・劇団だるま
国鉄浜松工場演劇部 合同
-

会員募集 連絡先 54 - 1111 内線 461 長谷川



18世紀仏蘭西演劇研究会

CONTENTS

207 ML.

池谷内山太田大橋小田木神田小池鈴木長谷川牧田松井和久田山下

象の死

引佐町青年学級

○スタッフ

演 出 野沢久夫
舞台監督 野沢未八
効果照明 鈴木章義

〃 影山寿子

○キャスト

大井 (獣医主任) 前島 功
石井 (陸軍獣医中尉) 河村 博史
山野 (動物園の雇員) 青木 邦寿
栗原 (大井の助手) 石川由紀子
うめ (大井家のばあや) 杉山かず子

○あらすじ

さないでください。サカダチをみたいです。」という手紙とともに、友だちと集めた一円三十銭をチェリーの餌代にと送ってきた。大井も栗原もそして山野も、間もなく死ぬであろうチェリーのなき声と、子どもたちの願いに心は苦悩した。

餓死寸前チェリーには最後の夜となるう折も折、大井の末娘が発熱重態となり、ばあやうめのもの、「家へすぐ帰るように。」「人の命と動物の命とどちらが大切だ。」との説得にも耳をかさず、ひたすらチェリーの最後をみとどけようとする大井だった。

大井は、獣医学界に発表した、臨床学説のなかで、象の餓死は十五日以内と発表したがチェリーは、その学説を裏切って、三十七日間を生き続けたのだ。絶食後十五日間は、早く死ぬ……研究がふいになる。」と考えた大井だったが、今は一時間でも二時間でも生きのびよ、そしてお前に餓死の苦しみを味わせた者たちに科学の無慈悲と戦争の

第二次大戦中、動物園へは、軍部から猛獣は殺せ。という命令がきていた。

西郷動物園でも、獣医主任大井が、手しおにかけて育てたライオンが、そして熊や虎が国策のため、つぎつぎに毒殺されていった。

大井は最後まで、「わしには、可愛い動物を殺すことはできん。」と頑張ったが、所詮軍部の命令に叛くことはできなかつた。

明るかった大井も、そのころから無口に変わってしまった。

やがて、人気者の象のチェリーにも運命の日が近づいた。チェリーには、餓死の方法がとられていた。チェリーは、食を絶って三十七日、十二、三日で餓死するという予想を裏切って生き続けた。軍部からは、矢の催促である。軍部の命を受けている石井は、ついに恩師大井を国賊よばりまではじめた。

そんなある日、小学生より「チェリーさんを殺

ザンコクさを思いしらせてやれ、チェリーにかわって、この餓死の苦しみを世界の良心に訴えなければと疲れた身体に鞭うって餓死寸前の記録をとり続けた。

そしてその夜、チェリーは死んだ。しかし死の寸前、記録をとる大井の姿をみて、最後の力で、元気な時の倍も長く、サカダチして見せるのだった。

「ばか、止める、まだわしを苦しめるのか。」と大声で呼んだ大井が、フラフラと倒れるのと、チェリーが、どっと倒れて息をひきとると同時だった………。

私たち引佐町青年学級演劇クラブは、二、三ヵ月前発足したばかりで、このたびの公演も練習不足であり未熟ですが、力いっぱいがんばります。

『逃散』

劇団茶の実

今から約三四十年前、その年の米の不作や、漁獺も、網や針を仕立てることが出来なくなつて、多数の餓死者がでるまでになつた。越前米の浦の村民は「御年貢米御容謝」を、奉行所え三度も願ひ出たが拒絶された。

そこで、庄屋彦左衛門を中心に、村民百六名は、意を決して越後に逃散することになった。時期もせまって、今夜が舟出の日であり、越後の百姓兵四郎が道案内に来ているのだが、六蔵のようすがおかしい……。

人物

米の浦庄屋・彦左衛門 高橋 精造

長男 市兵エ 山下 良次

越後の百姓・兵四郎

見廻り役人

演出 代表者

嫁 かつ
娘 ゆき

村人 六蔵

高橋 淳子

渡辺 早苗

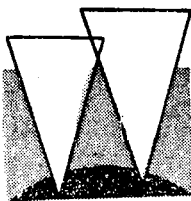
鈴木 正美

高氏 義久

森下 孝雄

中津川 栄

平賀 孝晴



浜松放送劇団・劇団たるま
国鉄浜松工場演劇部 合同公演

ピーター・シェファード作 米村 晰訳

ブラック・コメディ

演出 村越 一哲
舞台監督 小栗 雅
舞台装置 布施 佑一郎
照明 中村 昂平
野口 光一 杉山 勝義
戸塚 祐子
太田 喜雄
衣裳 鈴木 節子 富田 洋子
鈴木 多見子

『配役』

プリンズリー(前衛彫刻家)

三井 康雄

電中は舞台はこうこうたる照明、幕あきと幕ぎれの一瞬、電気がつく場合は真暗闇となります。劇中ライターやマッチをつけると照明は薄暗くなるのです。爆笑のうちに、混乱は極致に達し、人物のエゴイズムや狂気があらわとなり、そこに人間の真の姿が浮かびあがるといふしかけです。

・上演に当って思うこと・

英国では、アマチュア劇団が上演する際の著作料が、一幕もので最低50ドルと決まっているという。だから、多幕物や入場料をとった場合には大変な台本使用料を支払うことになる。今回のブラック・コメディも日本に於いては二万二千円以下の使用料で上演した所はないと言う。

日本のアマチュア劇団にとっては全く大変な出費であるが、木下順二氏等の主張するように「台本がなければ上演は不可能であるから総収入の割は作者に支払うべきである」という御高説も当

キャロル(フィアンセ) 鈴木 利枝
ファニーバル(老嬢) 斉藤 千春
メルケット大佐(キャロルの父) 牧野 照彦
ハロルド(古美術蒐集家) 岡本 和孝
シュツパンズィヒ(電気修理人) 古賀 昭隆
クレア(以前の恋人) 水村 春江
バンベルガー(大富豪) 岩崎 竜太郎

「ブラック・コメディ」は、題名通り、真暗闇の中でドラマが展開されますが、作者は京劇の「だんまり」にヒントを得て、舞台上の明と暗とをあべこべにするというトリックを十二分に生かしています。

停電中のアパートに、前衛彫刻家と婚約者、昔の恋人、大佐、老嬢、古美術マニア、大金持、電気修理工が入り乱れ、暗闇の中で起りうる一切の混乱、珍妙なしぐさ、取りちがえ表情とは裏腹なセリフのやりとり、だましあいが行進します。停

然であるかもしれない。確かに、著作権は尊重されねばならないし、又そういう様にならないで、良い劇作家も生まれてこないであろう。然し、現在のアマチュア演劇にとってそれだけの出費を払ってまで上演して行く力は乏しいのである。

堂々とそれを払って演って行くイギリスの文化というものに対する伝統やものの考え方、国家の姿性が、産業第一主義の日本とはえらくへだたりがある様な気がしてならない。

GNP世界第二位の大国かも知れぬが、文化の面から言えば、世界何位になるのか知りたいものだ。文化面でも世界屈指の大国になった時こそ初めて大きな顔が出来るのではなかるうか、文化と言うものが余分なものであると言う考え方が抜けきらないうちは未だ未だ日本は後進国であると言う事を強く訴えたいものである。

